

た者であるのかもしれぬ。支那の譯字さへ伽藍鳥である。又、あふりか土人は物神 (Fetich) といつて鶏や、熊や、蛇、或は河石、齒、木、貝、穀、等を頗る靈顯ある者として崇拜して居つた。其爲め此言葉は、崇拜とか靈顯、といふ意味とも成てゐる。其他東西の神話、佛説等の中に表はるゝ神や佛の御名にも甚だ多い。それが色々に用ひられて、ばらだいな (極樂)、べいな (昇平)、ぶらいえいぼす (ぎりしやの羅神)、ぶれい (遊び)、ばあづ (鳥)、いんべりおる (帝)、えんばいや (帝國)、ばわあ (力)、びくと (びくと人)、それよりびくとぐらふ (象形文字)、びくちゆあ (繪畫、肖像)。又 (P) の轉が (V) になつたらしい言葉では、ゞいくとあ (勝利者)、ゞいくとりあ (英女皇)、それより、ゞいくちゆあある (食物)、ゞいきまゆにや (ゞいきまゆにや 駱馬、之は南米あんです山に棲んでゐる長い帯紅毛が採取せられるので有名) 等々。そして夫等の語意の本が大抵、日或は火に關してゐる。ひこほほてみの命、あまのほひの命、大日如來、ぎりしやの太陽神ひべりおん、即ちへりおす、及び其孫の、へすべろす、それに之も太陽神、藝術の神、光の神として甚だ有名である、あぼろ神等、數へ擧ぐれば限りがない。

又、都市にあつても、へりをほりす (えじぶと最古の重要都市の一としてぎりしや語の「太陽の街」といふ意。) の都をはじめとして、ばびろにやの首都、ばびろん、之には「神の門」といふ意味があるさうである。之などは出雲の「神門」(かんど) などもはからずも暗合してゐて面白い。それに、だるまのべぐ、印度のべしやわる、支那、滿洲ではべきん、べいびん、獨のべるりん、佛のばり、露のべとろすぶるぐ、殊にあふりか地方、及び其沿岸の都市、山河等の名に甚だ多い。元來、あふりかとは Africa と書くが、元 (F) なる音は、(V) が (B) に音轉してゐると思はるゝやうに、(P) より (Ph) に轉じ、(Ph) が更 (F) に轉じて來てゐるらしく思はれる。故に、あふりか、或はあびりかといつた時代が、嘗つての大昔にあつたのではあるまいか。

之に類した者で、今いうた V・P・B の音轉に就て少しく補足すれば、彼の貝食時代の項で言つて置いたやうに、原始人の、重要な一つの發生活動として、其最も雄なるもの、一つであるとした例の、Peking、之も (Pe) なる音根が日、或は火の烈射より來たつたもので、それが聽て古ぎりしや人の用ひた小楯の Pella の意、それ

より *Peltate leaf* (楯状葉)、などの語が生れ、終に、皮即ち生皮とか毛皮、裘衣、といふ風な意にも用ひらるゝやうになり、其邊緣といふ所より邊緣とか、篋とか、裂片、といふやうなものにまで通ふ意味の移行がほの見える。若しさうであつたものならば、之は纏て、(B)根にも移行して、*bell* (鐘、鐘形物、金屬の皮殻の形より) 又、*belt* (帶革、或は拳などでぶんなぐる事)、即ち *Pelt* の意味をも兼ねてゐる。*Beltane* (舊五月一日の篝火祭)、*belly* (葡萄やほづきの如く、果皮の大部分が漿質となる果實)、といふ意味であるが、それだけに其果實といふものが薄ければ薄い程印象づけられる。其ことがやがて小粒の漿果とか、珈琲の實、穀粒、蟹の卵粒など、即ち東洋(殊に日本)に於ていふ粒(つぶ)に類する意をも兼ねてゐる。それが更に(V)根に来て、*Velamen* (被膜、根被)、*Velar* (蓋膜の)、*Veld, Veldt* (木のない草原、曠野)、即ち樹木らしいものゝ少しも見えぬ草原の表面を野の被膜と見たといふやうな意味の轉らしい。*Velle* (船の帆)、*Vellation* (小せり合)、*Velloity* (行動に現はるゝほどに至らぬほどの一寸した意志、又は欲望、と

いふ意があるのだが、是等は恐らく微細にするとか、微粉にするとかから、人の心理にまで延びて移行して來たのでもあらうか。而も言語調としては、その全體が弱く且つのびやかに、即ち流暢になつて來てゐる。

*Velliate* (びく／＼する。播擲する)、それより *Vellication* (筋纖維痙攣)、*Velum* (一種の皮紙)、*Velvet* (天鵝絨)、*Vent* (噴出口、隙間孔)、*Venture* (冒險)、*Verb* (動詞)、*Verge* (縁・際)、*Vertebra* (椎骨、部分的の骨の集まつて柱の如くなる意か)、それより *Vertex* (頂點)、*Vertu* (古奇)、*Very* (甚だ)、*Vespa* (胡蜂)、*Vesper* (宵の明星、金星)、*Vesper-bell* (晚鐘)、*Vessel* (壺、盃、罐、椀など)、*Vest* (胴衣類、自動詞で、傳はる)、即ち一は壺形、二は *Pelt* の連續して物を打つ機能の傳はる意へも、*Pelt* の絶えず輪廻するといふ意へも轉じやう。*Vesta* (ろま神話の竈神、即ち竈の女神)、こゝへ來て彼の *Api* の語が、まほめつと教徒により、*Pete* がはわい土人に依て、又、あいのの *Abe-kamui* が、共に火神とか火の意であるのとよく似ることゝなる。

又、短艇(ぼうと)の語の最初が、ほととがる語、即ち *Portuguese* の *Bateira* (はし

ていら)よりといふのが普通の解のやうだが、之も、希臘語の *Patera* (ばつてら)、英語の *Plate* (板・皿)、*Pan* (火皿)等に見るが如き皿の形、或は *Pastella* (小皿)の形から來たのかも知れぬ。又、*Pan* は銅即ち、*Erypan* (ふらいばん)の其 *Pan* (ばん)ともなつてゐる。又、一釜の麵麩、又麵麩の一焼き分といふ意味で、*Patch* (ばつち)といふ言葉もある。*Pa*(ば)より *Ba*(ば)或は *Va*(うあ)に。*Pa*(ば)より *Bo*(ぼ)に、それより *Po*(ぶほ)、*Pho*(ふほ)、*Fo*(ふお)、*Ho*(ほ)といふやうな順序に、さうした音語が(F)とか(H)の根——音子に變つて行つた傾向が見える。又、鵝(ばん)、之も後來(ばん)と讀むやうになつたのだが、此鳥の頂には一片の赤い火のやうな鶏冠をもつてゐるし、栃木縣足利市の鏝阿寺(ばんあじ)、別に大日堂ともいふのださうであるが、之も後世(ばんなじ)と稱ぶ様になつた。さうしてみると、彼の般若といふのも梵語で *Prajna* 之を智慧と譯するのだがさうだが、印度の北部、及び中央部一般に行はるゝ梵語系の方言に *Prakrit* (ぶらくりつと)といふ言葉があつて、*Nature* 即ち天然自然といふ意味であるらしい。是

等も、もと火とか焰に關した意もあつたものか、そのばんにあがばんにやとなり、後、はんにやとなつたのかもしれない。

此様に、日とか火に關した語根とか音子が若しさうだとすると、最前も言うた様に、回回教徒のあび、之は *Api* とか *Apv* 或は *Ape* なのかもしれないが、「*Apv*」には「熱」といふ意があるらしいが、*Ape* も *Api* も現今の普通辭書には無い。只 *Ape* は *Ape* と讀ませて猿、其他の譯がしてゐる。之は餘程近世の讀方かもしれない。それに布哇土人の *Pole* 又あいぬの *Pi* 或は *Ape* 等、共に火の神、火の意の音語としてどこかに一脈の一致點がある。さうかと思へば梵語のあび (*Avi*)、之は佛説で阿鼻焦燒といふ意に用ひてゐる。恐らく罪業とか邪惡心の良心に絆され、苦惱に燃ゆる姿を象徴したもので、勿論佛性の火とか焰に關しての語であらう。又佛説での火天は名を些吉、惡祁尼、(火神で佛教中の火天)、些吉利多耶尼、杯言ふさうである。火神は火天、又は火尊ともいひ、火を司る神。阿祇彌 (*Ami*) は火。印度神話の地上神の最高神。吠陀八天の一、火神にして火を擬人化したもの。梨具吠陀

の千二十八の偈頌中、いんどら、即ち帝釋天に次で此神の讃歌が最も多い。其古代帝釋と並びて印度人が崇拜せしことの大なるを知るべく。後、護世八天の一になりて、東南の方位を司り、其國土をぶらちようていす (Prājāpatis) と云ふ。此神は神と人間の媒介者にして人家を保護し人の行業を監守する天帝として信せられ、後、婆羅門教にあつては三脚七臂の赤人にして、常に青牡羊に乗る、といふやうな謂がある。右のうち吠陀に就て調ふるに、Veda は一に古印度、あるや民族の讃歌集、ともある。阿闍婆吠陀 (Atharva Veda) といふ語があり、之は古代、神聖と見做された阿闍波といふ拜火僧の經典、ともあり、娑摩吠陀 (Sama Veda)、之は歌詠の義で、そま (Soma) の儀式の時、神前で歌ふもの、とあり、夜柔吠陀 (Yajur Veda)、祭祀に關する定式を載せたもの、等のことがあり、又、(Vedānta)。(また一んた哲學) といつて随分研究せられたものらしい。

こゝで一寸氣のついたことに、此、Ve の語音であるが、之を漢字に譯して吠と書してある。はい或はべいと讀み、辭義には犬の鳴く聲、とか、吠ゆるといふ意味

がある。之を英語に照らして見るに、犬の鳴聲を bay (べい) といふ。それより吠ゆるといふ意にもなつてゐる。Ve 音が Bay 音になり、意と共に全くの暗合をなしてゐる。又、bayadere (べいやでや) は印度の寺院所屬の舞妓、即ち巫女のやうな役であるらしい。Bayard (べいやあど) は佛蘭西の武士とか、武俠人の意、又、物語りに有名な馬で殊に Aymon の四子所有の大快走馬で、其中の一人が乗れば普通の大きさであるが、四子共に乗るとその馬の體が所用に應じて延びたといふ Pindaldo) の乗馬といつて名高いさうである。

そこで今度は阿祇憍に就てゐるが、之は阿耆尼ともある。即ち二面三脚七臂の姿で常に羊に乗つてゐる火神である。又、Agnus (あぐなす)、Agnus-bell (あぐなすの鐘) といつて神羔誦 (Agnus Dei) 中に鳴らす鐘、といふ意で、此、Agnus Dei といふ意には、(a) 神の小羊 (十字號旗を持つてゐる小羊の像できりすとの表章)。(b) 神の小羊の姿を印した蠟餅。(c) 神羔誦。即ち Agnus Dei の語で始まる祈禱、といふやうな意味がある。

以上の類語によつてみると一寸氣づかるゝことに、兩説共に羊に乗つてゐることである。殊に *Agnus Dei* に於ては、佛教の説と天主教と其源が略々一致してゐるやうな傾きさへあつて、さういふ所は語の源泉が同一であるのか、それとも暗合であるのか、それは勿論私には分らない。が宗教のはじまりに於てよく火を司る神とか、佛陀があらはれ、後、それが火をも意味するやうになつてゐるらしい。此火の力は日の神とか、如來の力と見做した事から來た者で、下界の火はその神佛の力とか、働きとかの分與された者とする傾向に成てゐる。彼の國土、*Perjo-*に於て火を司る吠陀八天の一に鑑みて、*Deacon* なる語に、烽火、篝火の意味の存する所、又、青牡羊や小羊に乗る *Agnus Dei* に鑑みて *Rinaldo* の乗馬、また、*Bayard* なる語が、後世武士の龜鑑の稱になる前に、熊や狼杯の姿に化けて、火も鐵も之を害する事の出来ない勇士であると傳へらるゝ狂戰士北歐の神の、*Berserk* の名にも想ひを寄すべきである。最前も言つたやうに、般若 (*Prajna*) も、*Pratistis* といふ國土も、*Prakrit* の方言も、總ては *Praise* なる普通語も、何となく音の上にも、意の上にも一脈通ずるものゝあるやうに思はれる。

も、意の上にも一脈通ずるものゝあるやうに思はれる。

さて、再び *Api* (あび) 等の等類音に歸つて、さうした類音、英語の *ape* といふのは、*ape* の約であるさうであるが、どうも之は遠く適けくなるといふ意味や尖る音、等の意味があるらしい。故に太陽とか、南方の星座などの音根をも成して居る。又、*Pe* だの *Ap* だの、音根に花崗岩質を意味するものが多く、従つてその轉音と思はるゝ *Ve* とか *Be* とかの頭音をもつてゐて、火山系に屬する山の名が西洋には甚だ多いやうだ。さうして *Ap* の準音である *ep* が、上方へ揚ぐる、といふ意味に用ひらるゝ所より、此語根がすべて上方とか上向の意になり、それより *up* と *on* とつながつて *upon* となり、更に *upper* の語根をも作つて居る所などにも、それ等と次第に關係し合つて居るであらう。

殊に火とか熱、或は光澤に關し、また炙つて食する食物に關するとか、熱帶地方の果物等に於ても仲々に多い。ばん、ぶれつど、ばびるす此ばびるすは紙の發明

以前に *Cyperus Papyrus* といふ莎草科の蘭に似た多年生草本を古代の えじぶと人がないる河畔から採つて来て、其莖を薄く剃いで一枚づゝ縦横に交互に重ね、壓搾し、滑澤を加へて精製した紙の代用品で、英語の Paper (ぺいばあ)、獨逸語の Papier (ぱびいる) 等、皆この語音の轉訛したものである。

ペンキ、ペイント、ペいちか、(はるびん邊の暖房、及び燃料)、ばきんぐ、ばかりい、ばぼう。ばばいや、ばいんあつぶる、ばなな、ばつぶ、此ばつぶ、の綴りは Pap で、Mamma と同じく乳頭のことをいひ、また小兒の食べるばん粥をいふ。

ばアば (Papa) が とつさま、即ち (father) といふ意である所は、まアま (mama) を、かあさま、即ち (mater)、或は (mother) といふのと少しも異ひはない。

外國に於ても、原始に於ては日本と同じやうに、男女に對する言葉の混一してゐた時代があつたらしい。それより ばばいん (ばばいや汁の精) や、それに ばぼうといつて、熱帶獨特の豐潤な蕃瓜樹の實をいふやうになつた。又、羅馬法王をも、ばアば (Papa) といひ、牧師をばアばす (Papae) 或はぺいばしい (Papacy) 又、法王

又は教主をも Father といふやうになつた。

依<sup>レ</sup>是觀<sup>レ</sup>之、もと男女の性別に關し、其語の發揚が、或る場合渾沌としてゐた時代があつたやうに、父に對しても母に對しても、其子よりして見れば、只二人の親としての存在を感じるばかりで、父は男子、母は女子といふ様な、性の差別としての父母を感じて居ず、丁度我等の幼兒の時と同じやうな心持ちが、相當長するに及んでもそれが其儘にあつたではあるまいか。只父母は、子をはごくむだけのものゝ意でもあつたのか。

此頃見付けた語に、支那に 爸 (は) といふ文字がある。爸は、ちち (父) といふ意で、其解に「(正字通) 夷語稱<sup>ニ</sup>老者<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>八八<sup>一</sup>或<sup>ニ</sup>巴巴<sup>一</sup>、後人因<sup>レ</sup>加<sup>レ</sup>父<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>爸<sup>一</sup>字。」とある。此註の、夷は因より國外といふ意であらうから、外國の夷は、老者、即ち子供に對する大人である親達のことを、八八 (はは)、或は 巴巴 (ばば) と言ふ。其言葉より後人が 巴 (ば) の字の上へ、父といふ字を加へて 爸の字に作り、之を (は) と讀ませて (父) と同じ意に用ひた、といふ意味らしい。

私思ふに、此八八は齒齒、即ち和語の母(はは)で、巴巴は、ばば、PaPa、即ち歐語の父の意である所より、爸の字を作つて(は)と讀ませ、ちち(父)の文字に當てたものではなからうか、と。

へこ(杓權)、之は熱帶地方の木生羊齒類の一である。それにへこにや杯もさうした地が原産地であるといふ。日本にはへこ(牛)蝦夷語の *Peko* の訛、又、ひえ(稗)といふ草、ひひらぎ(柎)といふ木等がある。柎は元くりすますつりに用ひられた物、我國では年の瀬の魔除に「柎さす」といふ行事を行ふ。伯耆のひのかは(日野川)、出雲のひいかは(斐伊川)、今のひかは(篠川)等、索むればさうした由緒の音語名は甚だ多い。あぶら(油)、是は外國より來た言葉といふ説があつて、それも或は然らんか。あ・び(ぶい)・ら、あ・び(ぶい)ら(阿・火・良、或は例の *A<sup>Pi</sup>良*、*Abe* 良、後、あぶ・ら、となつたではなからうか。あぶ(虻)の如きも、ぶは蜜蜂(*honey-bee*)の *bee* が(*buzz*)翅音の擬音よりであると同様に、又、刺された時の痛さとか、虻の日中飛

ぶ光景とかより尖火の感を齎したとも思はれる。(P)或は(Pi)の音根、音子に依て虻蜂に刺された時の様な感覺を示す擬音轉化の語としては(*Wasp*, *Picket*, *Pinch*, *Piquant*, *Prickle*)更に又、(P)音よりの音轉とも思はるゝ(*bite*, *hot*)等もある。如斯く、日とか火、熱、光、尖りといふやうなものに對して、此、P、B、V、H等の語根をなしてゐるものが仲々に多い。

彼の支那に、遠き世よりの有名な汨羅といふ川があつて、其汨といふ辭義は、水の亂るゝ貌とか沈み居る、といふ意であるさうな。所が、三水に日といふ旁である所から想像してみると、そこに、水と、日との關係などはなかつたものか。私思ふに、水の亂るゝも、沈むといふも、此の洋々たる川の水面に日の映らふ所より來たものではあるまいか。太陽が燦々として照らす時、此川の水面の綾に亂るゝ様が實に管らぬ美しさを呈するとか、或は日夕の太陽が此水に沈降する時、そこに眼も眩ゆる計り反射するといふ様な處から來た文字ではあるまいか。泊、即ち三水に白、抑、白といふ辭義には、白くして西の色と云ふ意がある。

故に此泊の字は靜に船の留まる事、泊り宿る、といふ風に成つたのであらう。

又、泊(べき)は恰も其反對で、元、陽光燦爛と輝く深い水を湛へてゐるといふのが本意ではなかつたらうか。べき、或はべきであつたのかもしれない。

我國にあつては、櫓をひ或は、ひのきといふ。此木をもつて鑽れば火を得る、といふ所より來た名らしい。又、ひとつ(一つ)をひといふ。之は天に太陽のひとつといふ觀念から來たもので、矢張り日と通ふ音語ではなかつたらうか。つ(漣)、つ(乳)、みつ(蜜 honey)の意。ち(乳)、ち(乳より体内の血になるといふ意より血)、血液の不思議なる働きより靈。此、ちの轉の、み(身にも實にも通ひ)、みの轉の、び(美にも通ふか)。即ち靈の字を、びと讀まざるゝことがある。之は全くの轉音である。けれども、もつと心を切にして、日、に思ひ合はせ、火、等にも想ひ到つた意もあつたかもしれぬ。

熟々思ふに、原人の口腔が只、肉を食ふこと、相手と闘ふ事に於てのみ、最も

有利な様に出來てゐた顎骨、及び顚顚關節の構造が、纖維性食物其他を粥狀に咀嚼せんとすることに依て發達した臼齒と、糖分を攝取して腦の實質の發達に因る、智、情、意の生成、分派を明らかにし、それと共に口腔内の構造が次第に變化し來り、終に下顎、殊に顎部に於ける發達が、それに附隨する機官と共に、發音等に微妙なる運動をはじめ、音語等の歸趨にも管ならぬ影響を與へた。その結果、時代の複雑するにつれて一面、語が主觀的になり、且つ誠に流暢にも成て來た。その主觀的、根本的に溯つての情緒に伴つて、流暢に、且つ峻情的になつて來た所に音韻といふものが生まれた。如斯く音語が音韻として別に、促情とか煽情、叙情といふやうな場合に、音韻の生ずる様になる、迄の或は其以後の消長を知るあらんが爲、斯く其沿革の一端を述べた次第である。

尙ほ後日の參考の爲め、英辭書中より、手當り次第に(P)を頭音とする諸語を摘載し、其中より日、火などについての、音語に對する轉化等の種々相を想像してみらるも一興であらう。



例へば、火、に就ていへば、*fire* (火) とか、*fire* (火事) とかいふ語の (f)。或は *Spit* (灸串)、*Spark* (放電火花、及び燧石より發する火) 等に就いての (P) の音。或は又、*Laze* (焔) の (b) なる音子の關係が、如何なる推移をなしたものであらうかの想像等。今以下に、音根 (P) に關するものゝ一部を摘載し、私の假想をもちよいく加へて參考とするならば、

- Piassaba* (ぶらじる産の椰子の一種。葉の形とか實より來たものか。)  
*Piaster* (いすばにや、とるこ、いたりや等の銀貨。模様とか鑄造の形等に就てか。)  
*Piazza* (通常いたりや都市の中央廣場。)  
*Pica* (鵂、尤も讀方 (i) は長音である。もとは短音であつたかもしれぬ。嘴本で物を啄き掠ひ、食する所よりか。第二の意として味覺異常の精神病者、鵂に連想したもか。尙ほ *Pica* の語は第三の意として十二が活字の事をもいふ。)  
*Picadura* (屑煙草で製した紙巻煙草。)  
*Picaroon* (掠奪、海賊、惡漢、之も鵂を *pica* といつたやうな連想よりの名か。)  
*Picalilli* (鹽とか辛子とかを鹽梅した一種の漬物。)  
*Picanniny* (黒奴の幼児。)  
*Picidae* (啄木鳥科。)  
*Pick* (尖器で突くといふやうなことから、摘む、などの意にもなつたものか。)  
*Picative* (くちむ、尖晶石。)  
*piccolo* (高音小笛。)  
*Pict* (往昔、蘇の東部に住んでゐた一種の民。)  
*Picto-graph* (北米土人などの象形文字。)  
*Picture* (*pick*, 或は *pictograph* より來たものであらう。)

- Pie* (饅頭練の、即ち火熱によつて作られた食物。)  
*Pie* (*spice*. 英領印度に用ひらるゝ最小の銅貨。)  
*Piece* (片、火器、錢貨。)  
*Piecrust* (焼つたばいの皮。)  
*Piedmontite* (紅寶石。)  
*Pierian* (古 *Macedon* の一地方、*Olympus* 山麓に位して *Orpheus*. 及び九みゆうず神の生地と傳へられてゐる所の *piera*.)  
*Piety* (敬神。)  
*Pinton* (羽。)  
*Piano* (洋琴、之は當代に屬する語であらう。)  
*Pig* (元來は豚といふ意であるけれども、豚肉、即ち火工した肉より來た者ではないかと思ふ。尙、*熔鐵爐* から出た鐵、鉛等の塊をもいふ。)  
*Pigtail* (燃りたばこ。)  
*Pilldown man* (一派の原始人。)  
*Pina* (あななす。)  
*Pinang* (檳榔子。)  
*Pinguin* (西印度地方のばいんあつぶるに似た獸。)  
*Pinnacle* (頂上、極致。)  
*Pip* (籐のびよびよと鳴く、又は雛が卵殻より出ること。)  
*Pithecanthropus* (猿人。)  
*Pitch* (極點、水平に投げる。)  
*Pap* (乳首、ばん粥、軟肉。)  
*Pan* (鍋、ばん神。)  
*Patera* (皿。)  
*Plate* (板、それより皿といふ意もあるさうである。)  
*Pile* (火葬堆、古代貨幣の裏面。)  
*Timento* (揚梅科の未熟の乾果。)  
*Pinaciae* (松杉科植物。)

Pineapple (鳳梨。)  
Pin-wheel (火の輪花火、茲に来て始めて Pin の語源が針尖狀、とか火に關したものである事が  
證せられた事に氣づく。)  
Pipe (鳥の甲高に鳴く聲、又、管、日本の古語に鶴の時告げをくだかけといふ、意味の時合か。)  
Papacy (羅馬法王。)  
Papa (父。)  
apex (向點、太陽の天空に向かつて進む地球上の一點。)  
Apollo (日の神、光りの神、藝術の神。)  
appearance (出現。)  
Sparkle (光る、寶石などの光り、之は最初の例の Spark から來た語と思はれる。)

蒐め出すと限りないことだから先づ此位にして置いて、是等の綴りの中の(P)の音子と母音族によつて成される音根、及び語根を精査して想像を廻らすと實に趣きが深い。殊に以上の例に在てさへ、火に關した物及び、光りの形、或は、尖り、頂き、硬さ、喙き、日星、幼稚さ、原始的、それ等のものゝ發達から、ひいて敬神的等種々に移行し、交渉しあつてゐることが識られる。同時に、兎角人間發音の最も初めらしい音として、私は此、ば(びや)、び(びや)、ぶ(びう)、べ(びえ)、ぼ(びを)の音源に注意をして居る。例へばあゝぬ語の「べ」である。べは元、川といふ意味もあり、従つて太古に在ては、川に邊りして住む事が全ての點に於て最も便利で且つ

自然であつたに違ひない。後「邊」の意も生じ、部落の「部」の意ともなつた。

即ち音の轉ずる沿革としては、初め、べよりべに移つた。其例として現在在る者で、ちんべ(珍部)、之は姓である。たつべ(竹瓮)、だんべ(だんびら壺)、たなべ(田邊)、わたなべ(渡邊)、やまべ(山邊)、かはべ(川邊)、いけべ(池邊、池部)、かつべ(勝部)、あべ(阿部)、いはひべ(祝部)等皆共に存してゐる。それが今日では漢語等の影響を受けたのと、口腔の構造等によつて變化し、文語等に於ても、例へば今の「邊」を(べ)とか、(へん)とか、或は(へ)の音語を使驅するやうになつた。後此、邊と部とは殆んど同一音に用ひられ、なんぶ(南部)、あのへん(彼の邊)、かはのへ(川の邊)、へにこそ(邊にこそ)等々數へ來たれば限りが無い。之は屢々試みるやうに是を泰西の語に執つて觀ても眞によく似て居ると思ふ。最初(P)の音子が(Ph)、變て(F)等の音根となり、(V)、(B)の根音とも轉じたらう事は、既に言つた。外國の語にもさうしたものが可也澤山あるやうである。それ故に事によると(Pi)の語根の變化が fire, flame, flash 等となり、Vulcan (火神、火山)、Vomit

(噴焰)、Volute (渦卷)、兎角(V)の頭音は(空)、(室)、(渦)等の意を表はす物に甚だ多い。それ等が纏て Laze: beam, bright, brilliant, 等愈々出で、愈々複雑になつた様な種類の者も甚だ數多くある。同時に日や火の音根に見てもそれを恐れ崇め、且つ悦び慎んだ形跡があり、として感じられる。

以上の如くして觀ても、なべて語が原物そのもの、象形しやうけいとか、形態、其他の機會に因つて生まるゝことは、西も東も略々同じものゝやうである。

音子が(P)ではないけれども、星の光といふに Twinkle などといふのも、矢張り或る原始性實感音で、細く鋭く尖つたものに、Pine といふ語が生じ、それより Pine (これは松であるが、松の葉のびんや光りの形に似てゐる所よりか)などの語の出來たやうな、さうした順序の例が、誠に多い。

日本語の中にも「びんからきりまで」「びんびんしてゐる」とか、「びんと出したよ」、などと、方言や俚謠等にさへ見られる、物の堅く立つ様、或は其、先きといふ意味より、はじめといふやうな意味にも用ひられ、又、光りとか其強さの儘に、「び

かびかびかる」「びっちいし」「燧石」「てんび」「天日」「まつびるま」(眞晝間)等の、び、即ち日や火に對して頗る原始性を帯びた音が、種々頭音を受けての變化によつて、うすび(薄日)、くもりび(曇日)、したび(下火)、はなび(花火)等の如く、び、なる音に進化して、びかびかびかる、更にひかひかひかる、ひうちいし、のひ、殊に Fa, Fi, Fu, Fe, Fo, ya, Ha, Hi, Hu, He, Ho 等に迄、音の分解が行はれそれが、い、ゐ、の如く音便して愈々音の複雑な分解と發育が行はれて來たものではないかと思ふ。

今、之を繰り返してさうした推移の豫想を、其順に想像してみれば

- |     |         |     |      |         |         |         |           |
|-----|---------|-----|------|---------|---------|---------|-----------|
| (1) | Pia(Pa) | Pui | (Pi) | Piu(Pu) | Pie(Pe) | Pio(Po) | より        |
| (2) | Bia(Ba) | Bui | (Bi) | Bin(Bu) | Bie(Be) | Bio(Bo) | に移り又      |
| (3) | Fia(ha) | Fui | (Fi) | Fiu(Fu) | Fie(Fe) | Fio(Fo) | となり、口腔内、發 |
| (4) | Ha      | Hi  | Hu   | He      | Ho      |         |           |

の頗る近代の音として、輕快な、樂な音語の根を形成してゐる。而も音語研究に

當つて其最も繰り返し／＼注目すべきは、暗合と類語と、語音の推移である。

茲に稍々外見異なる形のものに就き、辭書等によつて少しく調べを進むれば、Sam. 之は Samuel の小辭であるが、Samson. (大力のあつたへぶらいの士師)といふ意であつて、之が Sannies (歐洲で稱ふる米兵)、即ち日本の、さむらひ (武士)といふ音語に頗るよく似てゐる。又、禪定三昧の (さんまい) は梵語 Samādhi から來てゐるから當前であるが、Saniel といふ語は (生ま焼け) の意味で、瓦などに對していふ言葉であるさうだが、日本でいふ、さめる (冷める) と音も意もよく似てゐる。又、Sambo といふ語の意味には黒人といふ意味もあるといふことだが、尙ほ黒人と、みゆらつと [白黒雜種人] との間に出來た、子、といふ意味もあるさうである。Samoa は太平洋南西部諸島の人種をいひ、Samoyed は、さもいえど族の民 [シベリヤに住むうるあるたい派の民]。それが Shame となると耻 (主に女心の、とか太古では女の前のこと、現今では廣い意味になつて耻ぢること) の意味もある。思ふに太古よりの Sambo の辭義から轉じて來たものかもしれない。其 Shame が後、Same. (同一) と

か、(同様) とか、(同種)、(同性狀) といふやうな意にまで轉化變延したものとみれば、之も一種の語としての進化を意味するものかもしれない。

Sand (さんど) 他に (壽命) といふ意味もある。それよりといふ譯でもあるまいが、Sanbenito (地獄着物) といふ語もある。かと思へば、Sanctification、或は Sanctify (神聖にする、或は聖靈)、それより Sanctuary (聖殿、賢所の稱)、是等の場合の (San) は (Shun) の發音ださうである。之が Sine となると、(健全な)、(心の確かな)、(正氣な)、といふ意になり、(Sans)、佛蘭語で (San) といふやうに發音すると、(無い) といふ意になる。Sanskrit は梵語で、而も 完全 (Perfect) の意があるらしく、Santa-Claus 之は誰れしも知つてゐる、(授福翁)、まさかそれからでもあるまいが、同音に近い thank you. の thank (感謝) といふ語もある。

又、(Shun) なる音語が、聽て最終の目的、或は宇宙、六合、全存在等の意味の Sun. それより Sun (太陽、日輪)、ひいて男性的に取扱つた言葉で、Sungod (日神)、Summer (夏)、Son (息子) 等、即ちそれが彼の Sanscrit (完全) なる梵語の意

より、終に東洋の佛教を生み、所謂「無」の境地を開いた。即ち消極の極度的存在を認識しやうとした傾向のあつたことに對して、泰西では積極の極致にまでの存在を認識しやうとした形跡がある。けれども音語的經路の暗示を享くる上からいへば、殆んど出所の同じい感のするほど、左様に音語なるものが、思想なり人性なりに遅れて、否な、曾つての世の其儘なる關係が認められる。之れは一に人文思想は、其國々の氣候風土、人性等の關係によつて各々歸趨を異にしたのであらうが今日の如く、交通其他の機關の備はつた文化の上には、殆んど其歸する所を同じうするのもかもしれぬ。而も其事に向ふや否やとは別問題として、さうした或る世界的範圍を共に把持してゐるといふこと、それも一の暗合であるのかもしれない。

又、Pin, pen 共に鋭く尖れるもの、恰も亦それの如く Pinna (翼・羽)、pinac<sup>le</sup> (尖塔、頂上、高峰)、Pinnate (羽狀葉)、Pine (松)、その尖るもので壓した點といふ所より、Pip (骰子の目等の小孔)、而も雛などのびびと鳴く聲も想像に入られて、雛の卵殻を啄き破つて殻の外へ現はれ出る事をも、此 Pip で云ひ表はせる。

其尖れる物に因る小孔とか、感覺といふ意か、Pipe (管)、PiPer (胡椒)といふ。圓管の意より煙草のばいぶ、又、笛、笛をふくことをも Pipe、笛吹く人も PiPer で言ひ現はされ、さうした高い音、耳にたつやうな音とか、鋭くつかくと尖る、その形とか、それがまた味ひなどといふ感官へ移つて、Piper、即ち胡椒屬をいひ、五官より更に心理的に移つて、びく／＼する形容を Pipin といふ。尙ほまた官能と心理的(感應)と相半ばしたやうなもので、Piper (甲張つた鋭い音、泣きみそ)、又、PiPuant (舌をびりびりさせるやうな刺戟)、斯うした形、音等から Piston だの Pi、即ち雨滴の點する様とか、或はその Pip などの語より來たものか、孔、或は凹所、凹穴といふ意にもなり、梅などの核、之は Pip が梨だの林檎だの、種にいふのと同じらしく、我々も時に柿の種などを、びつと吐き出す事がある。さうした物には必ず表裏の關係にある穴とか凹といふ物があつて其意にもなつたらしく、其凹みとか、びく／＼する意が終に、みぞおち(鳩尾)、むなぐら(心窩)をもいふやうになり、又、さうしたことに關係してゐるらしいものに Piapat (どろ／＼する、ばた／＼とする、

ぼと／＼などといふ様に、動悸の高まる意にもなれば、滴のしたゝる意にもなつてゐるやうである。今もいうた種を吐き出す形容は、日本でも、ぺつとかびつとかいふ。Pitch (水平に投げる) といふ意も、矢張り掌より球を吐き出すやうに滑らす點から出た言葉かもしれぬ、又、さうしたことから Split とか Point といふやうな類の音語も出来て來たのであらう。

Pay (規復) といふ所より、支拂ふ) といふ意味にもなれば、賃銀といふ意味にも進化してゐる。Pea (集合體)、それより Pease (各種の豆)、之は五穀豊かな意の爲か、兎に角戦の後に言ふ意としての、平和、太平といふ意にもなつて居る。Peon が働く者、又は從者といふ意で People (人民) ともなれば、Pep (競争心) ともなり、Pepperpot. ともなれば、Peppies ともなる。

さて、此様に種々と變化してゐる點に十分に着目して、靜かに語なる物の推移を究むれば、實に愉快なことであらう。是れ實に「言語學への出發」と題し、その一考案としての音語に就いて、聊か勝手な假説を建てゝみた次第である。

## 資料集録

尙ほ本文を草するに當つて参考とした辭書類の中より摘載して置いたもの、及びその時々々の心覺えを、間々に私見を加へつゝ、茲に記しつゝることにした。

### (一) に・し・に就ての資料

に、<sup>ニ</sup>土、<sup>ニ</sup>丹、<sup>アカニ</sup>丹土ヨリ來ルカ。瓊、五色ノ玉。  
し、<sup>ニ</sup>風ノ義。

にし(西)、(日ノ往<sup>イニ</sup>シ方ノ義ト云ヒ、或ハ和風ノ約ニテ風ヲ元トスル語カ〔荒風、旋風ノ類〕トモイフ。共ニイカガ)

- (一) 方角ノ名ノ南ト北トノ間ニテ、東ト反對ナル方。即チ日ノ入ル方。西ノ方。(二) 西ノ風。
- (三) 西ノ淨土。
- にし(螺)、<sup>ニシシ</sup>丹肉ノ約ト云フ。

ひむかし(名)東(日向風ノ義ニテ風ノ名ヲ本トスルカトイフ。シハ風ナリ、あらし、つむじノ如シ。

天孫人種ノ西ヨリ東へ遷移セシ語ニ出ヅルナルベシト云フ。琉球ニテ北ヲにしト云フモ、亦天孫民族ノ南進シタルニ因ルナルベシ。

ひがし、ヒンガシ、ヒウガシ、(一)四方ノ一。(二)東ノ風。(三)京都ニ對シテ鎌倉幕府ノ稱。

ま(名)眞、マコト、ホンダウ、イツハリナラヌコト。

ま(名)目、眼、目ノ轉、多ク熟語ノ上ニ云フ語。マカナイ、マナジリ。

ま(名)閉、(一)アヒ。アヒダ、アハヒ、ヒマ、イトマ。(二)コロマヒ、ヨリ(機會)、(三)音

樂、舞曲ノ調子、拍子ノ移リ變ハル機、(四)家ノ柱ト柱トノ中間。(五)坪(六尺四方)、

(六)轉ジテ屏風ナドニテ仕切リタル内ノ間ヲ閉ト云ヒ、又轉ジテ家ノ内ヲ分ケテ敷居、鴨

居ヲ入レテ障子ナドニテ隔リヲ作リテ全ク一室ヲナセルヲモ閉ト云フ。座敷、部屋。(家、端

(參照)

ま(名)馬、うまノ約。

ま(名)魔、梵語<sup>マヤ</sup>魔(摩羅)ノ略、舊譯ノ經論ハモト磨ニ作ル、梁ノ武帝ヨリ魔ノ字ニ改メシト云

フ。(一)人命ヲ害ヒ、人ノ善事ヲ障礙スルモノ。(二)轉ジテ心ヲ亂ス靈、惡シキ神、天魔。

ま(助動)未米ノ意ヲ云フ助動詞ナルむ(將)ノ變化ナルベシ。(行カマホシ。)

ま(副)今、いまノ約、まあ、更ニ加ヘテ、モ、モウ。

ま(接頭)眞、御、又ハ實ニ通ズ。(一)マコトノ、偽ナラヌ。(二)正シキ、片寄ラヌ、正、

(三)雜ナキ、純。

ま(發語)眞、(前條ノ語ノ轉)美ムル意ノ發語ト云フ、ミ。

ま(接尾)モノノ状態ヲ云フトキニ添フル語、(コリズ、アハズま。)

以上の中、支那、印度等より入りしと覺しきは、語としては餘程後世の者と思ふ。之は主に原始時代の通語を心として思考する必要がある。以下の摘載に就て全ても然うであるが、變化せる語もそれに應じて考慮す可きで、例へば後に出で来る、はね(羽)の如き、私解では矢の先を、は、齒、刃、磬、等より來る者とし、其根に當る所に挟む羽(は)。それ故に、はねは鳥の一枚の羽、毛根を具備せる矢の形の者より轉じたものとしてある。ひら(平)は日良、火良、即ち日の光線の翼、又は焔に不思議を感じ、其千斷れゆく片に悦を感じた時代があつたことにより、それより花びら、雪ひら、のやうに薄く美しくちぎれたるやうのものゝ形

にいひ、後、田の平らなるを、ひらなどいひ、たひら(平)等となつたもの、やうに思はれる。

ら(名) 羅、(一)ウスモノ、ウスハタ、ウスギヌ、甚ダ薄ク織リタル絹布、今、紹ト云フモノ、此ノ

轉カ。(二)鳥ヲ捕フル網、トリアミ。

ら(名) 騾、牡ノ驢、馬ト常ノ牝馬ト交リテ生メルモノ、體小、強健ニシテ勞役ニ用キラル、然レドモ

更ニ繁殖スルコトナシ、ラバ、又牡馬ト牝驢馬ト交リテ生メルヲ羸ト云ヒ、弱クシテ使用ニ

適セズ。

ラ(名) 羅、男陰、[まら(魔羅)ノ上略]まら(魔羅)ノ條ノ(二)ヲ見ヨ。

ら(接尾)等、(羣)略ト云フ。(一)名詞、代名詞ニ添ヘテ物事ノ數ノ限リヲ上ゲ列ヌルニモ云ヒ(コ

レヲ内等ト云フ)其外ニモアルヲ略スルニモ云フ、(之ヲ外等ト云フ)、ナンド、ナド、我

等、彼等、少女等、コレら、ソレら。又物事ヲ大凡ニ指シテ云フ意ニモ用キル、字類抄「等、

ラ、類也、輩也」ココら、アチら、幾ら、今日ら、(二)又轉ジテ、人一人ニモ云フ、(吾

ガ愛ツル古羅)ノ如シ。

ら(接尾) (リ、れ、ろ、ニ通ズ)語ノ末ニツケテ云フモノ、普通、意味ナキモアリ、又、親愛ノ意ア

ルモアリ。

○ 萬葉 「ユコサキニ、ナミナトエラヒ、シルベニハ、子ヲ等妻ヲ等、オキテ等モキヌ。」

○ 同 「ヒサカタノ、天ノ河津ニ船ウケテ、君待ツ夜等ハ、アケズモアラヌカ。」

○ 古今集十、九、俳諧、「佗シラニ、猿ナ鳴キソ、足ビキノ、山ノカヒアル、今日ニヤハアラヌ。」

○ 同、四、「里ハアレテ、人ハ舊リニシ、宿ナレヤ、庭モ籬モ秋ノ野ラナル」

○ 拾遺集十、八、雜、賀、「岩ノ上ノ、松ニタトヘン、君君ハ、世ニ稀レラナル、種ゾト思ヘバ」

○ 濱中、中納言物語、「文字ノツクリ、筆ノ先ラ、云々」

は(名) 齒 [平ノ約、端ノ義] (一)動物ノ上下ノ顎、即チ口腔内ニ生ズル骨ノ如キモノ。(二)凡テ器

具等ニ細カキ刻ミノ竝ビ出デタルモノ。「櫛ノ齒、鋸ノ齒」(三)車ノ輪ノ縁、又ソノ縁ニ

アル多クノ凸起。「齒車」。(四)下駄ノ齒。

へ(名) 刃、[齒ノ義] 刀、小力ナド切物ノ縁ノ薄ク鋭クシテ物ヲ切ルベキ處。(背ニ對ス。)

は(名) 羽 [平ノ約、扇ノ意] (一)鳥ノ全身ヲ被フ毛、羽根。(二)ツバサ、翼、翅。(三)飛ブ蟲

ニアル翅ノ如キモノ。(四)鳥ノ羽ヲ、矢ノ本ニ着ケタルモノ、矢ヲシテ、正シク飛バシム

ル用トス。(五)羽振ノ略。威勢、權威。「鷹伺ノ語ニ起ル」



は(名)端〔邊ニ通ズ〕(一)端、ハタ、ハナ、ヘリ、ツマ、(二)末。

は(名)端〔或ハ云フ、半ノ音カト〕仿、ハンバ、零餘〔數ノ端、錢ノ上端。〕

は(名)葉〔平ノ約〕草木ノ莖幹、枝條等ヨリ生ジテ片々シタルモノ。其呼吸作用ヲ營ムノ機ナリ、形、色、種々ナレドモ、普通ハ楕圓形ニシテ扁平、綠色ナルモノ多シ。

は(名)派 ワカレ、エダ、流義、又ハ宗旨ナドノワカレ。

は(名)破、雅樂ノ曲ノ一體。

は(名)霸、覇〔總主ノ王ニ對ス、〕(一)甲兵ヲ用キテ諸侯ノ長トナリ、假リニ仁ヲ行ヒテ功トスルモノ。又一方ノ諸侯ノ旗頭。(二)武力、又ハ、術策ヲ以テ事ヲ行フコト。

は(辭)者、第二類ノ天爾波、物事ヲ各自ニ差別スルノ意ノ語、萬葉長歌「國ハラ波、煙タチコメ海ハラ波カマメタチタツ、ウマシ國ゾ蜻島、ヤマト國者」一人は去リ、我は止ル」等々。

は(感)(一)笑フニ發スル聲。(二)又、呼ブニ應ズル聲、(ハア)。

は(感)詠歎ノ聲、爲忠百首「ハルバルト、イソラガ崎ノ、波間ヨリ、鯛ツルアマノ、舟ノ見ユルは。」

は(接尾)把、東ネタル物ヲ數フルニ云フ語。内膳司式「芋莖二把」、太神宮式「小稅二百束」註「以三一把爲東」、一薪一把、藥三把。

は(接尾)羽、鳥ヲ數フルニ云フ語。

は(名)場〔場ノ音便略ト云フ、大庭ガ大庭(倭名抄、美作大庭郡、於保牟波)トナリ、又場トナリタルナリ)、トコロ、キドコロ、場所、席。

は(辭)差別スル天爾波ノ者ノ音便ニテ濁ルモノ。萬葉長歌「モミチ婆、取リテゾシヌブ、青キヲ者、オキテゾナゲク」コレヲば取ラム」「爲ズンばアラズ」此接續ノ意ヲ含ムヲ略スルモノ。

は(接尾)〔差別スル天爾波ノ者ヨリ轉ジタル語ナラム〕動詞、形容詞、助動詞ノ接續法ノ語尾ヲナス語、用法ニ、已然ト將然トノ別アリ。悉シクハ、篇尾ノ語法指南ノ、動詞ノ接續法ノ條ヲ見ルベシ。萬葉「タケ婆ヌレ、タカネ者長キ、妹ガ髪、コノゴロ見ヌニ、挿入ツラムカ」。

は(名)原〔廣、平ト通ズ、或ハ開クノ意カ、九州ニテハ原ヲはると云フ〕(一)平ニシテ廣キ所。倭名抄、一五林野類「原、八良」神代紀、上十五「天照大神者、可ニ以治高天原也」萬葉「何處ニカ、吾ハ宿ラム、高島ノ、勝野ノ原ニ、日暮レナバ」海原、河原、國原、(二)耕作セ

又平地、野、(三)林、神代紀上十四(往至筑紫日向小戸橋之權原、而祓除馬)同下十七「竹林」天武紀、下、七年十月「有物如綿、零於難波、長五六尺、廣七八寸、則隨風以飄于松林及葦原、時人曰、甘露也」。

は(名)大角、はらのふえ(大角)ニ同ジ、字鏡六十二「箴、簡吹、波良、又久太」

はら(名)洞、ほら(洞)ニ同ジ。

はら(名)發刺、琴ノ手ノ稱、源、三十四、下、若菜、下四十二「五六ノはら(五六ハ微ノ名)ヲ、イトオモシロクスマシテ、ヒキ給フ」。

はら(名)爬羅(爬ハ爪ニテ搔キムシルコト、羅ハ殘ラズ取り上グル義)人ノ缺點ナドヲ強ヒテアバキ出ダスコト。劉弁詩「爬羅盡ニ沙磧」。

はら(名)〔笑、又、薔薇ノ約〕薔薇科ノ灌木。莖ニ刺アリ。

はら(接尾)儕(部等ノ轉ト云フ。羣ニ通ズ)人ノ集合スル意ヲ表ハスモノ、ドモ、メラ、タチ、ラ、「弟子ばら」「宮ばら」「殿ばら」「ウカレばら」。

私説に曰ふ。蘭原、葦原、井原、稻原等は、おい(食)に關した原で、庵原の、いほ(葦穂)、それより居原(おはら)といふ意に通ひ、居る(ある)、食(居る)といふやうな意味の轉換が、不知不識の間に行はれたのではあるまいか、とも思ふ。(う)ばら(う)ばら(う)ばら(う)ばら(野居原)の略かもしれない。

以上を参考しても、脊(せ)に對する腹(はら)、阿腹(あばら)、肋胸部、即ち之

等生命の源泉たる大切な所の意の上に、喜ぶ感情の意ある(良)の稱呼がついて、而も平たく広い意の、原、源等に通ふ意のある所など、次第に私の假説に近づいて來る感がないでもない。

(二) ま・ら・に就ての資料

大言海に、

マ・ラ(名)魔羅、魔羅(梵語 Mara 智慧ノ命ヲ奪フ因縁トナル故ニ、能奪命ト譯ス、又、能ク修道ノ障礙ヲナス故ニ、破壞善者トモ譯ス、下略シテ魔トノミモ云フ、モト磨ニ作リシガ、梁ノ武帝、魔ノ字ニ作ルト)(一)天竺ノ誘惑ノ神。善者ノ進行ヲ妨グル神。又惡魔。義林章、六、本「梵云魔羅、此云擾亂、障礙、破壞、擾亂身心、障礙善法、破壞勝事、故名魔羅、此略云魔」(二)轉ジテ、陰莖。(蓋シ、僧徒ノ隱語ニ起レルナラム。障礙ノ最ナレバナリ)上略シテ、羅。倭名抄、三八莖垂類「玉莖、麻良、閉(一本)、是閉字也、俗云、或以此字爲勇陰、以閉字爲女陰、其說未詳」龍龕手鑑「(閉俗、閉正)」字類

抄「閉、マラ、屢破前、一云、萬良、今屢、閉字也」名義抄「閉、マラ」靈異記、中、第十  
一巻、訓釋「閉、萬良」醫心方（水觀）一「白馬塞」著聞集、十六、興言利口「まらハ伊  
勢まらトテ、サイジヤウノ名ヲエタレドモ」同、同「口舌ノタヘヌモ、コレユヘニコソト  
テ、刀ヲヌイテ、ヲノレガまらヲ切ヨシヲシテ」同、同「ワヅカナル小まらノ」。

以上に鑑みて、私は原始に於て、眼良、麻良、閉良等の意は、その由来よりし  
て、又、純正なる意義として想像し得る。それが後に到りて偶然にも僧家の隠語  
となつた陽根の意にも一致したであらう。尙ほ此「良」の意義が、愛すべき、良  
き、好もしき、楽しき等の驚きはむる意より轉じたることを想像し得る。此字義  
を想像してゐた折柄、佐藤仁之助教授の「古語の研究」が到着したからその中の  
四頁目より少しく摘載して見やう。

前略。「本来太古人の用ゐた「マラ」は他を親愛して美稱としたに相違ないが、其主として用ゐたのは  
工藝者の優秀なものに對して用ゐた美稱である。語義は眞良の義であらゆるものゝ中で最勝の美なるも

のといふ意である。その所以は工藝者が天才を發揮して製作した美術品の善美を極めてゐるのから之を  
製作した人の美稱にしたものである。又「マウラ」ともいふのは眞大善の義であるが、多くウを略して  
「マラ」といつたのが史冊に見えてゐる。」後略。

右の研究に依てみるに、私の「良」の辭義の解に頗る有利の説と成てゐる。そ  
して私は、それ等の辭義に對して、如何なる所よりさうした音節を有する語が生じ  
たか、それを一應原始に遡つて尋ねた次第である。即ち依之之ても、語音の研究と音  
語の研究との間に假りに誠に一寸見立てを異にした意圖が了解出来るであらう。

### (三) 言語學に就ての資料

今、結論を急ぐ爲め、言語學と音語に就て重々申して置かねばならぬのは、私は  
最初より此事に就ての豫備智識を少しも持ち合せてゐず、只平常の常識と考案に  
依て得ただけの者であつて、未だ専門的に「言語學」といふ者の書さへ一度も繕

いたことがない。それでは餘りに放埒、無責任の感があるので、茲に言語學に就て其概念を、少しく確實にせん爲め、又、後來何等かの参考ともならうと思つて、二三種の辭書をあさり其部より其大要の摘載を試みることにした。

言語學、言語學とは、言語の本質、諸現象を研究する精神科學。其形式、即ち音を研究する音變學 (Phonetics) で、音論 (Phonology) と、其内容、即ち意味を研究する意義論 (Semantics, Semasiology) とに分ち、又、音の研究 (Phonology) と、形態の研究 (Morphology) とに分つ。

前者は音變化、音喪失、等を研究し、後者は世界の言語の種々の表出法、造語法、言語の發達、沿革等を研究する。(以上、現代百科より)

言語學 (Philology)、人間の言語を科學的に研究する學問。言語學が科學として成立したのは十九世紀からである。勿論希臘時代から言語の研究はあつたが、科學的ではなかつた。十九世紀以前にはヘルダー (Herder)、イェニツシュ (Jenisch) などが言語を可なり研究した。而し一つの獨立した科學として研究するに至つたのはポツプ (F. Bopp) からだといつてよい。

次にはラスク (R. Rask) 及びグリム (J. Grimm) によつて所謂子音變化の法則が発見されたのであ

るが、此三人は大體に於て近代言語學の建設者であるといつて差支ない。フンボルト (Humboldt) に至つて言語が哲學的に研究され、言語心理學の發達の動機となつた。十九世紀の中頃ではシュライヒャア (Schleichler)、クルテイウス (Curtius) などは言語の形態的研究に貢獻した。その後マックス・ミューラー (Max Müller) は言語學を自然科學として取扱はんとして一般的に言語學とは何であるかといふことを廣く知らしむるに努力した。十九世紀の終には所謂口蓋音法則 (Palatal Law) が発見されたが、是は別に一人の學者の發見ではない。十九世紀の末期から所謂青年文法家 (Junggrammatiker)、ブルグマン (Brugmann)、デブリュック (Delbrück)、オストホッフ (Oshoff)、パウル (Paul)、レスキーン (Leskien) などが起り、音韻法則は例外を許さない、といふ主張をなした。中でも、パウルは言語史原理 (Prinzipien der Sprachgeschichte) を著して言語學の理を示した。

言語學最近の傾向は從來の言語學は主として言語の外形的研究をなしたのであるが、近代では言語に於ける精神的研究、即ち意義の研究といふ方面が論議されるに至つた。斯くて言語の内的研究は必然的に哲學及び心理學に關係を有するやうになつて言語哲學や言語心理學が起るに至つたのである。又、言語を社會學的に見る言語社會學 (Sprachsoziologie) なども起つて來た。言語哲學はフンボルト、シュタインハール (Steinhal)、ヴント (Wundt) から今日ではカシラア (E. Cassirer)、ホルツイツヒ (Holtzschig) などが代表し、一方には又、言語を文化史的に研究せんとするフォスラア (Vostler)、シュビッツア

(Spitzer) などがあつた。言語學の取扱ふ範圍は極めて廣いが、大體、(一) 言語の起源、(二) 文字の起原、(三) 發音、(四) 文法、(五) 言語の本質、(六) 言語の性質、(七) 言語の分類、(八) 意義論、などである。我國で言語學といふ名稱が出来たのは、明治三十二年であつて、それ以前には博言學といつてゐた。(以上、國民百科大辭典より)

言語學、世界各人種の言語の、起源、發達、變遷等を、科學として研究する學。(以上、大言海より)

語原 (ごげん) [英語・Derivation の譯語、起原、出所の意義、我が國にても桑家漢語抄、東雅、倭訓栞、其他、語原を説きたる書、往々あれど名稱なし、言のもとなどいへるあり、一箇の語の成立てる原。起原。由來。出自。出所。熟語なるもの(通、略、延、約、あり)、意義の移れるもの、外來のもの、など種々の成立あり。此語原を究めざれば語意の解釋を下すこと能はず、随つて誤譯すること多し。鶏(かけ)、雉子(きどり)、蛙(かへる)、狐(きつね)、猫(ねこ) 鳴聲なり、琴(こと) 笛(ふえ)、鼓(つとみ) は音なり。旗(はた) はたはたとひらめく、母(はは) は、愛(は) し、愛(は) しの略。鯉(つるぎ) は吊佩(つりはき) の約、馬(うま)、漁(いさる) は磯求食(いそ・あさる)、嚙(くさめ) は休息革命(くそくまんみやう) の急呼、唐土(もろこし) は支那の地名の諸越(しよゑつ) の文字讀。鵠(かさぎ) は鵠の朝鮮語かしに鵠(さき) の字音。痴(こけ) は佛敎語、虚假(こけ) の意の轉。鴨脚(いちやう) は鴨脚(あふきやく) の宋音。天鈇羅は天主教金曜日祭の伊太利語、

Tempora に出でたりなど説くが、語原なり。(以上、大言海より)

右、言海に引例してある中の猫、母、馬、等は、私説音語の中にも出てゐるが、此解では私の假想したものとは少しく趣きの異なつてゐる點がある。例へば狐(きつね) のねにしても、猫(ねこ) の場合のねと同じく、ねの一字が、矢張り鼠屬と見てのねの字の入り來りではなかつたかと思ふ。嚙(くしゃみ、或はくさめ) も私説音語よりすれば(くそまんみやう) の急呼といふ解よりも、寧ろはくしよん、はくしよ、はくしやい、といふやうな音より、くしゃみと成たもので、みは身或は鼻音のんを閉じた時のよどみの音、即ち元、はつくしやんみ、といふやうに聞えたことよりであつたのかもしれない。故に、くしゃめよりくさめ、くしゃみよりくさみに移つたのでもあらう。尤も此中、くさみは辭書にはないけれども出雲地方ではくさみといふ。而も此みには其時の顔貌等により、見にも意通ふが如きである。

之に類した二次性の音語とも見らるゝ、ひろめ屋の事を、ちん／＼どん／＼とか、相撲取のことはつきよいや、など、呼ぶ、あれと同一轍だと思ふ。

## 結 論

以上により、言語學、語原學なる學科の、如何なる者であるかといふことが、凡そ知られる。最前も繰り返していつたやうに、私の想像、或は解釋等に就ては、主に語の音に對する常識と、私の平常持つてゐた少しばかりの智識により、漠然と斯く思ひ、斯く判斷したのみで、専門的見地には更に立ち入つてゐない。今より思へば随分大膽な試みであつたと思ふが、併しそれかといつて私としては斯様な假説論も決して忽にしたくはない。何となれば、論中屢々言説したやうに、「言語學」の凡その研究項目は、既に言語として存在する所有要點（ちゆうてん）に就いての觀察とか研究とかである事はいふ迄もないが、只そこに言語といひ、語原といひ、語音といふ、畢竟之れ語なるものゝあつて後、其既存下に於ての謂の場合が多

く、それには何も異議をさし挟む餘地はない。只その事に於てのみの理解に止まると、總て言語なるものに對する興味、否な、もつと大切な或る何物かゝ失はれはしないかといふ恐れがある。そこで私は及ばず乍らさうした觀念に於ける見解、觀察等の上に、規線をやゝ大太古に向けて、音の發生其物を、人類各時代の環境と生活に則して、やゝ有機的に解釋してみやうとしたのである。即ち音語と命名して、語なるものゝ音を先きに立てゝの觀察を試みた。即ち在來の語音と私説の音語は、其間誠に微少な差ではあるが、其細微なる點に心を寄せんとする。即ち言語なる者が、音より言語と成たものと、言語より言語を生じたものと、其相半ばして生じたもの、或は理智的に、情感的に、又、音意的に種々様々に生まれ、而も其一字の音語と雖も、そこに心してみたならば、實に美はしく、さも微妙なるものが感じられる。即ち言語なるものが、徒（ただ）や愚なものでない、といふことを意識せんとするさうした興味にも私の意圖はあつたのである。それ故に此様な私説の部々々に、どの程度迄の新説をなしてゐるのか、又は舊説をどこ迄護らうとし

てゐる説になつてゐるのか、それは自分にも十分に解らない。併し此様なことが、今後の「言語學への出發」となり、其端緒に過ぎない者として、如斯き方針の多數と長大なる年月とによつて、纏て種々なる方面の研究が開かれ、且つ其參考ともならば眞に幸甚である。若しそこに同好の士あつて、如斯き説を爲す者に對して參考ともなり、且又、實際的に今日の學問上、其指示的位置等に就いて是等假説に向かつて有利の見解等あらば、奮つて御教示を願ひたいものである。

私、斯くの如くして熟々思ふのに、實に言語なるものは、自己の耳目にも相當する場合あり、同時にまた自己の環境の耳目たる姿を呈することもある。さうしてそれが纏て一國と一國との間の耳目となり、終に全世界の耳目を意味するものである。といふことに氣づくや、げに偉なる哉や、自己一人の言語は、それに應じてやがて、宇宙の眞體に對する相交渉すべき眞の耳目たるべき性質を具帶してゐるものであるかのやうにも思はれる。さうして之を心とすることに於て、其耳目は愈々繁く愈々濃密に、さうしていよいよ廣大にいよいよ微細に、其停止すべ

からざる精緻微妙の域にまで構成され、輕快に、瓏々に、或は活達され、莊嚴され、或る時は又、霞の如く朧ろくしき潤ひに、況や其名目の上のみならず、さうした言語の本質の海を見渡したならば、更に百花の爛熳たる氣韻に似て進化しつゝあつた事に氣づき、而もさうした語を、日常覺えず用ひ且つ見馴らされつゝあつた、音語なるものに對して、時たま想ひを潜むる所に、意義と重大性は存すまいか、否、私はそこに氣づかざるを得なかつたのである。

備考。あめ(雨)の音語の説明の部へ左の一章を挿入す

思ふに、人の發音構造として、あの音は比較的發し易いやうになつてゐて、殊に頸椎を後方へ折り曲げ、即ち十分に上方を向いても發し得らるゝ音であるので、此あ音が上方、かしら、いたゞき等を意味しそれがあ音によつて自然的に音味せらるゝやうになつたものらしい。あ・ま(天)、あ・た・ま(頭)、あ・に(兄)、あ・ね(姉)等のあ(阿)、そして其音の發し易いことより第二、即ち二次的といふ意に移行しあ・と(後・跡)の如きあととなり、之は後、をとる(劣)のをも同じ意と合して謙遜の意味ともなり、女子の名の上につくを(阿)などが其適例である。又、さうしたものの中間性的觀念の代表としては、あ・す(翌日)のあ、を・まへ(お前)のを(御)の轉化をもなした。即ち漢字の暗合として亞字のあである。又、其、次位のあ(亞)といふ意が、終に同じ形のものゝ數多くあるといふ意味に轉じ、細かなる小なるものゝ觀念へまでも誘導進化され、あ・め(雨)、あ・み(網)等のあともなつたものと思ふ。



不許  
複製

11.4.3

昭和十一年四月三日印刷  
昭和十一年四月八日發行

定價 金一圓五十錢

著者 原 鼎  
東京市麻布區本村町百十六番地

發行兼印刷者 中村 守雄  
東京市神田區鎌倉町一番地ノ六

發行所 東京旭印刷株式會社出版部  
東京市神田區鎌倉町一番地  
振替東京五二八〇一番地  
電話神田四一五九番

社會式株刷印旭京東

(昭和十一年一月中旬起稿  
年二月中旬了)



終

